体験とクリスチャン信仰
日本アッセンブリーズ・
オブ・ゴッド教団
西九州伝道所 佐々木正明

クリスチャン信仰は、体験に基づくものです。このように言うと、多くの「聖書信仰」を標榜する方々からお叱りを受けそうですが、その「聖書」によるとクリスチャン信仰とは、イエス様にお会いした「体験」に基づくものです。イエス様が天にお帰りになった後でも、甦られたイエス様に出会った体験が、ひとりひとりの信徒の信仰の原点であり、行く先々で語り続けた、証の内容でした。聖書の教えを正しく理解し、それに同意し、それを受け入れ、それを信じるというような、プロテスタント教会の多くが掲げる、「理解による聖書信仰」は、少なくても、聖書には見られないものです。

ペンテコステ信仰といわれる私たちの信仰の立場もまた、聖霊のバプテスマを受けたという信仰体験に端を発するものです。ですから、私たちの神学は体験を非常に重んじる神学です。そしてそれを間違っているとは思いません。すべての神学は何らかの形で、体験を背景にして生まれているのです。とはいえ、ここで大切なことは、たとえ体験を非常に大切にしても、体験に流されてはならないということです。私たちが自分の信仰の大切な原点として、いつもそこに戻ってくるような体験、神学の重要な部分として標榜する体験は、聖書の中に、模範にできる前例がなければなりません。自分たちの体験と同じ体験が、聖書の中に明確に、単なる一例としてではなく、規範となり得、模範とすべき形で、記述されていなければならないのです。

たとえば、異言の伴った聖霊のバプテスマについては、ルカが明らかな神学的意図を持ち、師匠パウロの監修を受けながら書いたと思われる、使徒の働きに明確に記されています。特に十章と十一章の、コルネリオの受霊と弟子たちの議論の記録が大切です。そこには、①ペンテコステの日に、弟子たちに与えられたと同じように、異邦人にも聖霊のバプテスマが与えられたこと。②③そのようにペテロが判断したのは、彼らが異言を語ったからであること。③ ペテロのこの判断が、当時の弟子たちの共通の判断でもあったことが、議論の余地がないほどはっきり記されています。

私たちの間にも、聖霊のバプテスマは受けたが、異言は語らなかったと主張する方々がいます。たしかに、異言を伴わない真摯なクリスチャン体験も、たくさんあります。ただし、それを聖霊のバプテスマだと言うためには、異言の伴わない聖霊のバプテスマなるものも存在すると、まず聖書の実例を示して証明しなければなりません。個々のクリスチャン体験を、それぞれの信仰の重要な部分とし、また、他の人にも同じ体験をするようにと勧めるためには、聖書の中に、後々のクリスチャンたちの、模範となり、規範となるべき種類の、実例がなければならないのです。

私たちの間でよく見られる、倒れる現象はどうでしょう。似たようなことは聖書にも記されています。しかし、聖書はそれに、何の重要性も与えていません。倒れるべきだ、倒すべきだという教えもありません。したがって、そのようなことを宣伝したり、倒れたことを自分の信仰の重要な体験としたりするのは、間違っています。金の粉が降ってきたとか、金歯が生えたなどの「奇跡」の話も、そこここで聞きます。しかし、それは聖書にはまったく記されていない出来事です。それも、私たちの信仰の重要部分にはなり得ません。

その他にも、按手によって使徒の賜物を分与するとか、預言の練習をするとか、先祖の悪行の影響を、祈りによって断ち切るとか、今、実にいろいろな事が行なわれていると聞きます。私たちは、果たしてそれらが、聖書に記されている正真のクリスチャン体験であるかどうか、聖書を注意深く読み返す必要があります。私たちは、キリストと出会った体験を証します。体験を大切にする信仰です。しかし、あくまでも、聖書に裏打ちされた体験信仰でなければならないのです。

一例をあげておきます。使徒パロは「第三の天」と自分が呼んだ、素晴らしい神体験、あるいは聖霊体験をしています。パウロの表現によれば、それはそれは素晴らしい体験であったようです。しかし彼はこれを他の人には勧めていません。あくまでも、自分が体験しただけのものとして、そのことを持ち出しているのです。一方彼は、ほとんどすべてのクリスチャンの、必須体験であるかのように、異言を語ることを勧めています。すべてのクリスチャンに勧め自分が誰よりも多く語ることが出来ると言い切って、その体験を高く評価していることです。そこで言えることは、「第三の天」の体験を一般的に求めたり勧めたりすることは、正しくないと理解し、あくまでもパウロという偉大な使徒の体験として、止めておくことです。しかし異言を語る体験は、すべてのク